

「東瀛詩選」と中島子玉(二)

解 読 木 許 博

(会員 佐伯市木立)

中島大賚(子玉)の詩(二)

(13)

病 婦

經月歌聲歇

芳塵日滿梁

釵寒金翡翠

衾冷古鴛鴦

青鳥歸何晚

離鸞恨未償

多情遂釀病

薄命易罹殃

巫拙難呈技

◎病婦

經月 歌聲 歇き

芳塵 日 梁に 満つ

釵 寒し 金翡翠

衾冷たし 古き 鴛鴦

青鳥 帰るは 何れの 晩

離鸞の 恨み未だ 償わず

多情 遂に 病を 釀す

薄命 殃いに 罹り易し

巫拙くして 技呈し 難く

醫窮屢易方

遁辭時蒼問

強笑卻增傷

暈險啼痕淺

顰眉黛色長

誰知心上事

唯炷影前香

衣袂遮嬌面

枕函藏艷章

癡情私自愧

夢裡或呼郎

醫窮すれば屢方を易う

遁辭 時に蒼問し

強いて笑えば却つて傷みを増す

暈險 啼痕 浅く

眉を顰め黛色長し

誰ぞ知らん心上の事

唯 炷影 前に香る

衣袂 嬌面を遮つて

枕函 艷章を蔵す

痴情 私かに自ら愧じ

夢裡 或る郎を呼ぶ

【大意】

幾日経つても歌声も聞こえず、相手の男性から音沙汰も無く、愛情も冷えたまま。多情の病婦には巫女(祈祷師)も医者も病を癒す手だては無い。顔色容貌衰えて自分の心の中を解してくれる人も無い。灯の前で袂で顔を掩いながら恋文を隠すと色情を恥じらいながらも、夢中で或る男性の名を呼ぶ。

【語注】

病婦びやうぶ 病の婦人

経月けいげつ 月を經る。幾月もたつこと。幾月か前。

歌うた やすむ。やどる。つきる。むなし。

芳塵ほうじん かぐわしい、においがよいちり、ほこり、健康不全。

釵さし かんざし。二本足のかみかざり。

翡翠ひすい ひすい。綠色の鉱石。硬玉の一種。

衾きん ふすま。ねまき。きょうかたびら。

鴛鴦えんおう おしどり。【鴛鴦衾】夫婦が一緒に寝る夜具。

青鳥せいちよう 青い鳥。仙女の使いとして青い鳥が来たという故事から、使者・手紙のこと。

離鸞りらん 鸞は鳳凰また天子。天子のそばをはなれる。

多情たじよう 多感。愛情が深い。うつりぎ。うわき。

釀じよう かもす・酒を造る。醸造。

薄命はくめい ふしあわせ。運命にめぐまれぬこと。

殃やう わざわい。とがめ・神仏の下すとがめ。天罰。

巫ふ みこ。かんなぎ。神がかりして人に伝える女。

方ほう 方を易う てだてをかえる。

遁辭とんじ 言いのがれ。にげ口上。

荅問とうもん 他人の問いに答える。問答体で書いた文章。

暈臉うんけん 目の下のくま。

啼痕ていこん 泣いたあと。

黛色たいしよく まゆずみの色。

炷たき とうしん(灯心)。

衣袂いけつ ころものたもと。

嬌面きやうめん 愛らしい顔。なまめかしい顔。嬌顔。

枕函ちんかん まくらもとのふはこ。文書を入れる小箱。

艷章えんしょう なまめかしい手紙。恋文。

癡情ちじよう 痴情 色欲の情。色情のまよい。

夢裡むり ゆめのうち。夢中。

(14)

題 畫

◎画に題す

山村連水郭さんそん すいかく 山村 水郭に連なり

高下入新晴こうげ しんせい 高下 新晴に入る

芳草藏驢背ほうそう とうせ 芳草 驢の背を藏し

人如空際行ひと くらさい 人 空際を行くが如し

【大意】

山の村、水辺の町。高く低く新たに晴れ。芳草が茂って驢馬の姿を隠した形となつているので、乗った人があ

かも空の中を歩いて行くように見える。

【語注】

水郭 水辺の町。河川や湖沼のほとりの町。

高下 高いことと低いこと。尊いことといやしいこと。

新晴 あらたにはれる。

芳草 かおりのよい草花。

騷 ろば。うさぎうま。馬より小さく、耳が長い。

空際 空と地が接して見えるような、はるかな空。

(15)

海棠窩集與諸士同賦

◎海棠窩集 諸士と賦を同じくす

向晚微雨收 晩に向かつて微雨収まり

墮露滴林抄 墮露林抄に滴る

涼月入澗蘿 涼月 澗蘿に入り

空庭生苧藻 空庭 苧藻を生ず

幽人病未癒 幽人 病未だ癒えず

伏枕欲娛少 枕に伏して欲娛 少し

有客敲柴門 客有り柴門を敲き

剥啄驚宿鳥 剥啄 宿鳥を驚かす

呼童掃階砌

設席傍池沼

舊醅酌濁醪

新炊薦香稻

吾久事宦遊

擔簞馳遠道

文章何所成

歸去悔不早

佻達談昨夢

金蘭樂新好

詩成月稍傾

械械風動篠

北隣有牛醫

藥杵夜深齧

童を呼んで階砌を掃き

席を設けて池沼に傍う

旧醪 濁醪を酌み

新たに香稻を炊き薦む

吾久しく宦遊を事とし

簞を擔つて遠道を馳す

文章何ぞ為す所ぞ

帰去早からざるを悔ゆ

佻達 昨夢を談じ

金蘭 新好を楽しむ

詩成りて月 稍傾き

械械として風篠を動かす

北隣に牛医有り

藥杵 夜深く齧つ

【大意】

晩に向けて雨がおさまり、月が草深い庭を照らす。病の自分を急に訪ねる人あり。にわかごしらえの席を池の傍らに設けて、地酒を酌んでもてなす。自分は仕官を志して長く旅を続け、文の道を遠ざけて来た。帰郷遅きに失して

しまつたが、いまここに親しい交わりを嬉しく思う。月が傾くまで詩作に耽りながら、落葉の音を聴いている。

【語注】

海棠窩 子玉の住居。海棠窩集 子玉の詩集。

海棠 Ⅱバラ科の落葉低木。

窩 Ⅱいわや。すみか。別荘。

微雨 こそめ。ぬか雨。細雨。

涼月 すすげにひやかな感じの月。秋の夜の月。

澗蘿 かずら。つる草の一種。転じて、隠者の衣服。

また、住居。

空庭 からの庭。何も植わっていない庭。

荇藻 あさぎ。はなじゆんさい。水草の一種。

幽人 世をさけて静かに暮らしている人。隠者。

飲娛 よろこび楽しむ。

柴門 しばでつくった門。転じて、むさくるしい家。

剥啄 こつこつ。訪問者の足音。また、門をたたく音。

宿鳥 ねぐらで寝ている鳥。

階砌 きざはしの下の石だたみ。階段下の瓦敷き。

傍う 寄りそう。

旧醅 ふるいどぶろく。にこり酒。

濁醪 にこり酒。どぶろく。

宦遊 仕官を求めて他郷に旅すること。

簞 かさ。遊学して仕官を求めること。

擔 Ⅱ担 になう。かつぐ。

桃達 たがいに行き来して会う。

金蘭 非常に親しい交わりのたとえ。金よりも固く蘭

よりもかんばしい交友。「金蘭の契」「金蘭の交」。

新好 あらたなよしみ。

檄檄 かえで。もみじ。かれる。葉がかれおちる様。

藥杵 薬草をうつきね。

橋 つく。うつ。たたく。

(16)

抵木刀村

東風似為我行謀

吹儘餘寒暖上裘

花逕頻迷類胡蝶

山途屢喘似吳牛

鐘聲度水知僧寺

旗影抽林認酒樓

◎木刀村に抵る

東風我が行の為に謀るに似たり

吹き尽くす余寒 暖裘を上ぐ

花逕頻りに迷い胡蝶に類す

山途屢喘ぐ吳牛に似たり

鐘聲 水を度るに僧寺を知り

旗影 林を抽じて酒樓を認む

且喜今春流潤月 且喜ぶ今春 流潤の月
好将一半附閑遊 好し将に一半は閑遊に附せんとす

【大意】

東風が吹いて余寒も去り散策の好季節。花咲く道に迷い、山坂路ではかなり苦勞して歩いたが、川向こうの寺から鐘の音が聞こえ、林の奥に酒店の旗が見えた。嬉しいことに今年は閏年であつぷりと余暇が楽しめそう。

【語注】

木刀村 佐伯領木立村。現佐伯市木立。市街地から7km

人口約二〇〇〇。抵る^{いた}至。

東風 ひがしかぜ。こち。春風。

余寒 大寒があけて後の寒氣。立春後になお残っている寒さ。

裘 上着のかわこころも。毛皮で作った衣服。

花逕 花の咲いている小径。

胡蝶 虫の名。ちよう。

山途 山のみち。みちすじ。途中。

呉牛 【呉牛月に喘ぐ】呉は南の暑い地方であるため、牛

が月を日と見、誤つてあえぐこと。ひどく恐れるた

とえ。ここは単に山みちで苦勞する意。

鐘聲 鐘の音。

僧寺 寺。僧院。僧堂。

旗影 旗影。はたのかけ。ここは酒屋の看板の青い旗。

酒樓 料理屋。お茶屋。

流潤 閏月のある年。

一半 はんぶん。半分。

閑遊 のんびりあそぶ。



木立村 (現：佐伯市木立)

(17)

龍川舟遊

◎龍川舟遊

(一) 四社宮前水拍天

六松堤下柳含烟

今宵弄月人多少

半在高樓半在船

(二) 十里澄江流向東

雙槳搖去柳灣風

女兒戲捉波間月

不省銀釵落水中

(三) 澹靄鸞聲雜鳳聲

欲娛誰識已三更

輕舟別有吟詩客

故覓遊船少處行

四社宮前の水天を拍ち

六松堤下 柳 烟を含む

今宵 月を弄する人多少

半ばは高樓に在り半ばは船に在り

十里 澄んで江流東に向い

雙槳 揺れ去る柳灣の風

女兒 戯れ捉う波間の月

省みず銀釵 水中に落つるを

澹靄 鸞聲に雜り

欲娛 誰か識る已に三更

輕舟 別して吟詩の客有り

故に覓めて遊船 少き処を行く

(二) 遙かに番匠の河が東に流れ、二挺立ての船が湾に漕

ぎ去つていく。船べりの少女が波間の月を捉えよう

として危うく銀の釵を川に落としてしまひそう。

(三) おだやかに水は流れ、紳士淑女、仲睦まじい夫妻の

語らいが楽しげ……。はや夜も更けたか。詩を吟ず

る客人を乗せた一艘の船が、賑わう遊船を避けるよ

うにして漕いで行く。

【語注】

龍川 龍護寺前の川。今の番匠川。当時は川筋が現状より

も入り込んでいた。龍護寺、中世佐伯氏の菩提寺。

六松 六本松磯。芳島魚市場のあった附近。

弄 もてあそぶ。

江流 大きな川の流れ。

雙槳 ふたつのかじ。かい。船をこぎ進める具。

柳灣 やなぎのはえている湾。

銀釵 銀のかんざし。

澹靄 水の流れと草のしげり。ゆつたりおだやかな様子。

鸞聲鳳聲 【鸞鳳】神鳥の名。転じて、すぐれた士や

有徳の君子のたとえ。同志の友のたとえ。仲の

【大意】

(一) 神社前の河は勢い良く流れ、河原の柳は烟つて見え

る。今夜は月見の客が多く、楼にも船の上にもいっ

ぱい。

良い夫婦のたとえ。

飲娯かんご

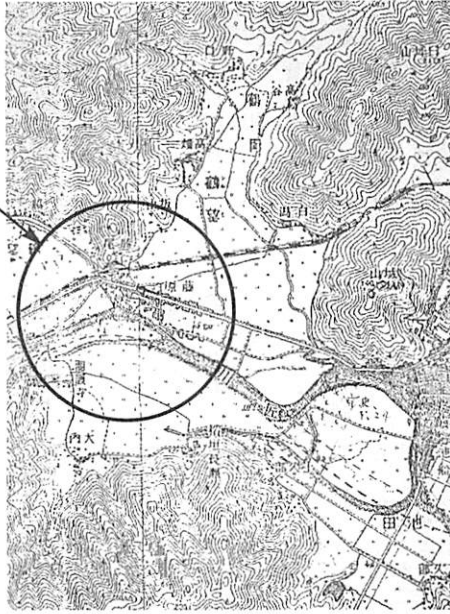
よろこび楽しむ。

三更さんこう

五更第三の時刻。今の午前0時前後。子の刻。

吟詩ぎんし

詩をうたう。詩吟。



この詩に詠よまれている「龍川」は龍護寺前の川であり、現在より複雑であった。

(明治六年地図参照)

(18)

河内路上かわちろじょう

前稿(16)、(17)、(1)、(2)、(3)に佐伯の地名が出てきます。子玉が江戸昌平疊に入る前に、佐伯に帰った時期の作品で、ここに挙げる「河内路上」も同じ頃の詩のようです。「東瀛詩選」には出ていないが、「愛琴堂全集」に載っています。

弥生「道の駅」に文学碑として、平成十五年に建立されました。身近に見られるので特に紹介しました。

〈正面〉

河内路上

中島子玉

木屐蹠跚下水辺

雪華初斂夕陽天

鵝毛已没耕牛目

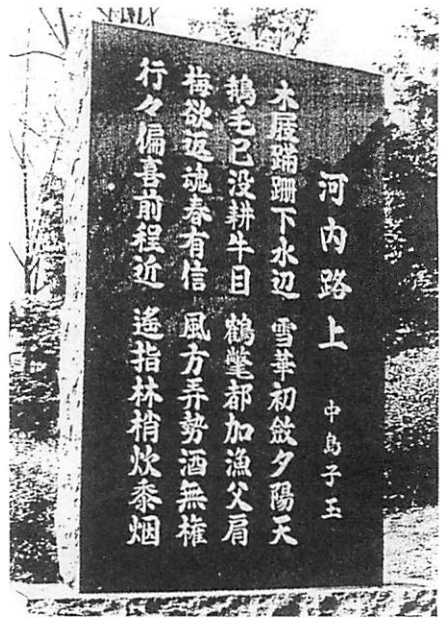
鶴髻都加漁父肩

梅欲返魂春有信

風方弄勢酒無權

行々偏喜前程近

遙指林梢炊黍烟



〈背面〉

木屐 踏躑として水辺に下れば
 雪華初めて斂まる夕陽の天
 鵝毛已に没す耕牛の目
 鶴肇 都て加う漁父の肩
 梅は魂を返さんと欲して春信有り
 風は方に勢を弄して酒權無し
 行々偏えに喜ぶ前程の近きを
 遙かに指す林梢炊黍の烟

下駄履きで雪の道を歩いてきて、よろめきながら水際
 のあたりに下ってゆくと、しきりに降っていた雪もやっ
 とおさまり、夕陽が西空に輝いて見える。

がちようの毛に似た、真つ白なやわらかい雪が、野良の
 牛の目にいっぱいかぶさっている。また、鶴の羽根で織つ
 た羽衣を着たかのように、年老いた漁師の肩に雪がつも
 っている。

梅の枝は精気をとりとどして春のおとずれを告げてい
 る。折から風が早春の気配のままに吹きわたり、腰をおろ
 して携えて来た酒を心ゆくまでに楽しみ味わう。

さて、気ままに歩きながら、行く道もそう遠くはないと
 思うと気分もゆつたりとうれしくなってくる。かなたの
 林の梢のあたりに夕餉の煙が立ちのぼっているところを
 めざして行くこう。

平成十五年三月 (訓読・口訳 木許 博)

弥生町長 一瀬茂亀



【語注】

河内路上 河内は固有名詞。実地は特定不明。

路上は道の附近一帯。

上は「ほとり」とも読む。

木履 木製の履き物で木履、木靴、下駄の総称。あしだ(足下、足板)とも。

蹠蹠 よろめくの意。

※初案は「騰々」(ゆるやか)の筆跡あり。

斂まる あつめおさまる。しまいこむ。ひきしめる。ここは雪が降りやんだこと。

天 ※初案は「鮮」の筆跡あり。

鵝毛 鵝はがちよう、身は白、頸は長く雁に似る。嘴大きく黄色。鵝毛は鵝毛雪、白雪のこと。

鶴鬣 鶴の羽根で織った羽衣、雪を負った衣。鬣は鳥の羽毛。

《参考》

- ・雪似鵝毛飛散乱
- ・(雪は鵝毛に似て飛びて散乱し)
- ・人被鶴鬣立徘徊
- ・(人は鶴鬣を被て立ちて徘徊す)

和漢朗詠集、謡曲などに出ている句で唐の白居易の作。

都て 凡、総に同じ。

漁父 漁翁 「ホ」は年寄りの男子。漁父、漁夫は漁業をする人。漁は慣用音。

信 信 おとずれ、しるし、たより、あかし。

方に ちようどいま。

勢 けはい(気配)。

弄す 任せる、もてあそぶ。

権 軽重大小を分別する標準。はかり(権)にかけて重量を知る。

行々こうじやう 行き行くさま。

偏ひとへに ひたすら、いちずに。

前ぎんてい程 これから先の道のり。

炊すい黍 黍を炊く、炊事。黍は五穀の一（餅・団子）。
煙けいりに同じ、炊煙、かまどの煙。

【この詩の型】

「七言律詩」

七字一句で八句から成る。一、二、四、六、八句の終

わりの文字が押韻（韻をふむ）

辺シマ、天ケン、肩ケン、權ケン、烟マ

五字一句で四句 ↓ 五言絶句

七字一句で四句 ↓ 七言絶句

この河内路上の石碑の前には、作者である中島子玉の
略歴が記載されている。

風雨により、現在は文字も薄くなっている。



中島子玉略歴

中島子玉(かとうこたま)〔1815-1880〕本名は大森(おほのもり)。字は半若(はんわく)。母は安代(やすしろ)。父は半若(はんわく)。祖父は半若(はんわく)。曾祖父は半若(はんわく)。祖父は半若(はんわく)。曾祖父は半若(はんわく)。祖父は半若(はんわく)。曾祖父は半若(はんわく)。祖父は半若(はんわく)。曾祖父は半若(はんわく)。

※建設

旧弥生町文学碑建設事業、撰文は小野英治氏

※位置

国道十号線「道の駅弥生」正面口の右

親水広場前

黒御影石、高さ二米